

### 三徳

日本人を語る上で大切なことがある。

日本には昔から、ひとつの道具でいくつもの役割を果たせるものがいくつもある。たとえば、五徳、十能のようなものである。

またお経にも、「無財の七施」、すなわち眼施、和顔施、言辞施、身施、心施、床座施、房舎施と呼ぶ「雑宝蔵経」がある。お金がなくても人（他人）に対して施しができるという「布施」の教えがあった。

また、日本語には、**思いやり**とか**おもてなし**といった外国語に翻訳できない、または翻訳しにくい言葉も多い。外国人にはそういう発想がないからである。

（中国で仕事をしている人の話。中国語には**優しい**とか**親切**とかいう表現はないなあ。）

いたわり、優しさ、譲り合う、手助けする、気配りする、他人の痛みをわかちあえる、などのように他人を思いやる発想のことである。

いくつも覚えるのは大変だから、あらゆる事柄にせめて3つのいい所をさがそう、という発想がある。

どんな人間でも商売や仕事、物品でも、少なくとも3つのいい面を探そうというものである。これを三徳と呼ぶ。「三光」のようにいい使い方をしたり悪い表現で表したりするものではない。根本的に異なる。

古来、といってもせいぜい100年前からくらいだが、「靴屋の三徳」というのがある。**触れます、匂い嗅げます、覗けます**。説明すれば、女性の足にさわれます、足の匂いも嗅げます、スカートの奥も場合によればのぞけます、というくらいの意味で、仲が良かった靴屋さんに言ったところ、ポカンとしていた。下世話な話、脚フェチの人にはたまらん商売やろネ。

屁にもある。「腹減らして良し。尻掃除できて良し。他人（ヒト）に匂い嗅がせてなお良し」というものである。これは説明は要らないだろう。ちなみに、屁は「こく」とか「たれる」ではなく、「ひる」が正しい。奈良ではこういうそうで、スナックで「ひるさん」と綽名をつけられた人がいたが、この人が正しい。理由は、「へっぴり腰」をみればわかる。

話はまったく変わりますが、ボクはいつとき江戸文学に興味をもったことがあって、高校生のころなど、地理や倫理社会の時間などによく内職で読みふけて

いた時がある。江戸文学は、いわゆる下ネタや汚穢（オワイ）ネタが多い。固体液体気体を問わずでてくる。ここでははばかれることのほうが多いのである。ここでは問題のないものを例に挙げる。

### 雪降り

夜小便に起きて、戸をあけんとすれども（註；昔の便所は外にあった）宵より雪降り、凍りつきてあけず、よきことを思い出したりと、敷居の溝へ小便をしかければ、心安くともあき、外へ出たれば、なにも用がない。

### 雪隠（セッチン）

丸の内へんにて大便につまりて、辻番へたのんでも貸さず、ぜひなくだんだん来て、霞ヶ関までまいりしが、しきりに大便でかかり、なんぎながら、そろそろ歩みゆく。道のかたわらに、色青ざめたる男、いじかり股で立っている。きゃつに聞くべしと思い、側へ行き、

「もしもし、ちとおたずねもうしたいことがござります。」

その男「なんでござる。」

「ハイこのへんでは、雪隠はどこにござります。私はことのほか、大便につまりましてこまります。」

その男、顔をしかめていながら、「きさまはまだ歩かれるか。」

これを読んだのが授業中だったもので、笑いをこらえるのに往生した。教師にはすべてわかっていたのであろうが、何も言わずに見逃してくださった。今でも感謝しています。

ボクはとりたててこの手の話に興味があるわけではないが、本や雑誌で見かけることがなぜかよくある。「知ってて知らない大便の仕方」など。

誰が書いていたか、まったく覚えていないのだが、昔は駅のトイレなど男女兼用の所があった。ある人がゆっくり用を足していたら、外から切羽詰った若い女性の声が聞こえる。「もう～～～長グソねえ！！」と怒っている。で一文をものして、随筆1回分を作ったのだが、長グソという表現が日本語にあるとは知らなかった、云々。たしかに「早メシ早グソ芸のうち」というのはあるが。